

## Japanese Written Task 4 「文学批評」

### 《ラショナルレ》

パート3では、オルハン・パムクの『わたしの名は赤』、島崎藤村の『破戒』を読み、文学と社会の関係性について考察を行った。この内、『わたしの名は赤』の中で、変化していく社会を背景とし、テーマの「芸術」と「恋愛」を伝えるための作者特有の語り方や物語の構成などについて考えてみた。

この作品は、「わたしの名は赤」の時代背景を、19世紀初頭の韓国（当時大韓帝国）とした短編小説である。同じテーマやモチーフを保って背景だけを変化し、文化・社会の過渡期の人々の生き方や感情、またその時代の不安定の社会的雰囲気は、時代や国を超える普遍的なものであると伝えることを目的とした。メタフィクション的叙述、視点を変える語り方、時間軸の同時進行などのオルハン・パムク特有の要素を含め、想定読者層の若い小説の愛読者へ、新鮮な興味をもたらしながら、上記のテーマをより効果的に伝えようとした。

### 《本文》

#### 1. 私の名前はウィリアムズ・ソンホ

大韓帝国に帰ったのも、もう12年ぶりだ。洋装を身につけて歩くソウル・鐘路(チョンロ)の街が、私にあまりにも似合わないため、それとも鐘路の街頭に近来に設置された街路灯がよりにもよって朝鮮の街中の似合わないため、あまりにも祖国に戻ったという感じがしないのが切ない。私が変わったのか、それともこの国が変わったのか。紛らわしい頭の中を整理しながら、国を離れていた12年間のことを振り返りながら、雪の降るこの街を歩いた。

私が国を離れた1899年、大韓帝国は設立直後の混乱を迎えていた。500年以上の歴史を終えた朝鮮はなくなり、欧州・米国の勢力によって開花を強制された直後の大韓帝国は、幼い私の記憶に鮮明に残っていた。小さい時から家族に捨てられ、アメリカ人のお家で育った私は、朝鮮人の両親に一この朝鮮という国に一愛情というものは一切ない。私を取り入れてくれたのは祖国の朝鮮ではなく、米国だった。

私のこんな幼児期は、可哀想ながらも、別に特別だとも言えない。他の小説でよくあるだろう？ アメリカにいた時に好きだった小説—「オリバー・ツイスト」だったかな?—という少年の話と全く同じではないか。あなたも一度読んでみるといい—私の気持ちがいよよくわかるだろう。

しかしながら私を受け入れてくれたアメリカ人はあまり悪い人ではなかった。朝鮮に旅行にて、この国の風景に感動し、家族と共に引っ越して来た芸術家—私が5歳のとき、彼の玄関の前に捨てられていたらしい。私に彼は父親のような存在だ。離婚後娘と二人で暮らしていた彼

らは、私に家族のように暖かく接してくれた。目や髪の毛の色が違って、言語と文化が違って、人間というものとはなんとか通じるようだ。

その家で育ちながら、私は彼の芸術に関心を持つようになった。朝鮮の絵画の単調な色彩、単純さとは全く違う、印象派美術家の明るいパレット、彼らの筆遣いを見て、私は美術家の夢を育ててきた。幼い頃、彼の画房で見た、油絵で描かれた、韓江を見下ろす楼閣に立っているソンビ（性理学者）の姿は、幼い私の記憶に印象深く残っている。その後から私の夢はアメリカで画家として正式に教育を受けること。今思うと、そんな変わる社会で、親を失って生きる私に、芸術というのはとある支えになったのではないかと思う。12歳になる年、1899年、彼の紹介でわたしは、米国で芸術を習いに行くようになった。

暗くなる鐘路の街路に雪が積もっていく。道端で足を急ぐ人々はコートの手を立って、または韓服(ハンボク)の巻物の結び目を掴んで、寒さを凌いでいる。道端の閉まった店々の屋根を照らす街灯の光は私の記憶を垣間見ている。

朝鮮で過ごした私の幼少時代、私には芸術だけでなく別の熱情も持っていた。それは私を取り上げてくれた彼の娘に向かったものだった。わたしは彼女にとって、単なる可愛い弟としてしか見えなかったと思うが、私にとって彼女は、家族であり、友人であり、恋人であった。彼女と別れて過ごした12年間、私は彼女をハンハン物足りなさや懐かしさを育てた。帰ってきたソウルの地を踏んだ私の心に浮かぶのは、野心にも私を育ててくれた彼女ではなく彼女のことだった。

遠くにある店の光がわたしの目を引いた。油を使った光ではなく、アメリカでよく見る電気を使った電球の光。近歩きながら感じるコーヒーの香り。私は米国でよく飲んでいていたコーヒーを思いながら、珈琲店のドアを開けた。

## 2. わたしはの成均館の儒者である。

ごほんごほん。私は朝鮮最初で最高の大学、成均館に勤める儒者である。何時ぞ、ある西洋人がやって来て、「私の絵のモデルになってくれないか」聞かされてな。油で絵を描くなんて、そんな妙な画家は初めて見た。色とりどりにぎっしり詰めた絵が何が「美」だということか。絵画は、性理学の精神と教えを込めて作れねまならぬ。色を使いながら凡人の絵を描くのが浅はかな。この絵も気に入らないぬ。私は韓紙の白墨でこの世に残りたかったのに。

そういや、諸君は知っているか？ 旧朝鮮の史観達が、王命によって実録（皇帝一代の記した記録）を出版するという噂を。国が滅びる様になんのため実録なんぞ出版するのか。それも洋装本の形で。